

有毒植物(4)

北大薬学部教授 三橋 博



タガラシ (キンポウゲ科)

田やみぞの中に普通にある2年生草本で泥の中に白色のひげ根を出し草丈は40~50センチ、根生葉は叢生し、茎葉は互生で深く3裂、一つ一つの裂片が3裂する。春に小形の黄色の花を多数開き、果球の形に果実をつける。タガラシはこれがふえて稲を枯らすからというがむしろ田の中にはえ味が辛いからであろう。全草に有毒成分のプロトアネモニンを含む。この物質は強い刺激性があり、皮ふにつけると水ぶくれのようになる。このなかまの植物であるキツネノボタン、ケキツネノボタンも同様の成分を含み有毒である。一方キンポウゲ科の中には薬草として大切なものも多い。



タケニグサ (ケシ科)

山野に普通にみられる大形の多年生草本、根も大きくオレンジ色、茎も中空で高さ2メートルになり、全体がほとんど平滑である。互生している葉は柄をもち円い心臓形で葉縁は鈍く浅い裂け目が入る。裏面は白色で短い毛がある。夏、茎の先端で分枝し、多数の小花をつけ大きな円錐花序をつくる。花のあと蒴果を多数つけ中にこまかい種子があり風にゆれてサラサラ音がする。この草を竹と一緒に煎ると、竹がやわらかくなるから竹煎草というといわれるがむしろ茎が中空で竹に似ていることから由来するのであろう。茎や葉に黄褐色の汁を含み、プロトピン、ホモケリドニン等のアルカロイドを含みこれらが有毒である。民間薬として茎、葉の煎汁をタムシ等に用いる。ケシ科には阿片を採取するケシをはじめとし、アルカロイドを含むものが多く注意を要する。



クサノオウ (ケシ科)

北海道から九州に広くみられ、特に道ばた石垣の間などに生ずる多年草、茎は50センチ位になり、軟質でオレンジ色の液を含む。クサノオウは草が黄色の汁を出すから草の黄の意味とも、また瘡(クサ)につけ有効であるから瘡の王であるともいう。ケリドニン等の成分を含み有毒である。胃癌に有効として用いられたこともあるが鎮痛程度の効果である。